

RSA 暗号アルゴリズムの正当性証明

—情報セキュリティ補足資料—

村川 猛彦

2005年5月20日

1 前提

1.1 使用する文字とその関係

- p, q は相異なる素数
- $N = pq$
- $L = \text{lcm}(p - 1, q - 1)$
- $1 \leq E < L, 1 \leq D < L, ED \% L = 1$

1.2 証明したいこと

$0 \leq M < N$ の任意の整数 M に対して, $(M^E \% N)^D \% N = M$

1.3 剰余に関して活用する性質

分配法則 $(x \times y) \% z = ((x \% z) \times (y \% z)) \% z$

剰余演算を含む指数法則 $x^{y_1 y_2} \% z = (x^{y_1} \% z)^{y_2} \% z$

中国人剰余定理 (2元連立1次合同式の場合) y と z が互いに素 (最大公約数が1) であり, $(x - \alpha) \% y = 0$ と $(x - \beta) \% z = 0$ がともに成り立つなら, $(x - \gamma) \% yz = 0$ を満たす γ が $0 \leq \gamma < yz$ の範囲でちょうど一つ存在する. 具体的には, $yy' + zz' = 1$ を満たす整数 y', z' を一組求めれば, $\gamma = (\alpha zz' + \beta yy') \% yz$ により求められる.

フェルマーの小定理 x が素数であり, y が x の倍数でなければ, $y^{x-1} \% x = 1$.

2 証明

M が p と q の両方で割り切れるとき，どちらでも割り切れないとき，一方で割り切れるときの3つに分けて証明する．

(i) M が p と q の両方で割り切れるとき: $0 \leq M < N$ の範囲では， $M = 0$ のみである．このときは， $(M^E \% N)^D \% N = 0 = M$ ．

(ii) M が p と q のいずれでも割り切れないとき: まず， $M^{ED-1} \% p = 1$ であることを示す． $ED - 1$ は L の倍数，したがって $p - 1$ の倍数であるので， $ED - 1 = r(p - 1)$ を満たす整数 r が存在する．すると，

$$\begin{aligned} M^{ED-1} \% p &= M^{r(p-1)} \% p \\ &= (M^{p-1} \% p)^r \% p \\ &= 1^r \% p \quad (\text{フェルマーの小定理を用いた.}) \\ &= 1 \end{aligned}$$

となる．同様に， $ED - 1 = s(q - 1)$ を満たす整数 s も存在し，

$$\begin{aligned} M^{ED-1} \% q &= (M^{q-1} \% q)^s \% q \\ &= 1 \end{aligned}$$

が成り立つ．

これらの式および中国人剰余定理を用いると， $M^{ED-1} \% pq = 1$ を得る．

この両辺に M をかけて N で割った剰余を求めても，等号は変わらない．このとき左辺は

$$\begin{aligned} ((M^{ED-1} \% pq) \times M) \% N &= (M^{ED-1} \times M) \% N \\ &= M^{ED} \% N \\ &= (M^E \% N)^D \% N \end{aligned}$$

であり，右辺は M である．

(iii) M が p と q のいずれか一方で割り切れるとき: 一般性を失うことなく， M が p で割り切れず， q で割り切れるとする．このとき，(ii) と同様に， $M^{ED-1} \% p = 1$ であり，この両辺に M をかけて p で割った剰余を求めると， $M^{ED} \% p = M \% p$ すなわち $(M^{ED} - M) \% p = 0$ となる．

次に q に関しては， $M \% q = 0$ なので $M^{ED} \% q = 0$ である．

これらと中国人剰余定理を用いて式計算を行うと， $M^{ED} \% pq = M$ を得る．

(証明終)